

## 第23回「日韓高校生交流キャンプ」参加生徒の感想文 ④

### 「遠い未来を約束する」

金 甫娥 (キム・ボア)

龍仁韓国外語大学校付設高等学校 1年



日韓高校生交流キャンプを一緒に過ごす家族(のような友達)に初めて会ったのは、7月16日、クムチョン区の現代アウトレットだった。初対面の人たちと並んで座り話をする時に流れる気まずい空気の中、正直期待より心配の方が大きかった。Team1のテーブルに集まって座っているこの5人と、日本という近くて遠い国で5泊6日を一緒にうまくやっていけるかどうか疑問を感じていた。

心配半分期待半分で迎えた次の出会いの場は、仁川国際空港だった。このキャンプで、素敵な思い出をたくさん作りたと思っていた私は、チームのみんなに積極的に声をかけ始めた。大人しくてしおらしい姿が印象的だったコニョンさんとも、私と性格が瓜二つのウンジとも、そして、私たちのチームを引っ張ってくれるメンター先生とも少しずつ打ち解けていった。

初めて日本行きの飛行機に乗って、仙台国際空港に着いた。その後、車窓から日本の美しい景色が眺められるバスに乗って、

「南三陸ホテル観洋」に到着した。割り当てられた部屋に入ると、日本の女子メンバー二人が先に来ていた。部屋の窓からは青い海が広がっていた。狭い部屋に5人も集まっていると、何かしないと、というプレッシャーと一緒にどうすればいいかわからない気まずさが押し寄せてきた。まず、私は用意して行ったプレゼントを日本の友達に渡した。さらに仲良くなるために、ワークブックを片手に簡単な日本語の会話を試してみたり、身振り手振りでコミュニケーションを図ってみたりした。

初対面の簡単な挨拶が終わり、それでもまだぎこちなさが残っている私たち5人はキャンプ参加者全員が集まるキャンプ会場へ向かった。そこで、私たちチーム1のみならずもう一度自己紹介をし合い、一緒にチームマガジンを作った。その過程でみんな少しずつ打ち解けてきたように思う。

新しくできた私の友達、ヒロとナナミに初めて見る日本の食べ物について一つ一つ質問しながら、みんなで一緒に初めての日本での食事をした。

その夜、私たちは、震災教育を受けながら、今私たちがいる場所について、また被災地域の復興のために一生懸命努力しなければならないということについて、真剣に考えてみる時間を過ごした。

翌日、実際に津波の被害がそのまま残っている南三陸の被災地域を訪れ黙祷をささげながら、まちおこしのためにみんなで頑張らなければならないということを実感した。その後、私たちは養殖漁業体験をするために、船に乗って、養殖場へと移動した。涼しい海風に当たりながら日本の友達と会話を交わしたり、その場で引き揚げてくれたホタテなどを試食したりした。特にナナミとは、どんどん仲良くなって行って、夏祭りの会場では、ペアになって一緒に経済現場体験をすることになった。アイスクリームや海産物の天ぷらなどを販売する体験をしながら、お店の方からいただいた食べ物を食べ合ったり、大阪から来たサッカー部の高校生たちと一緒に遊んだりして、一生忘れられない思い出をいっぱい作った。日本の学生たちは、何事にも一生懸命に取り組むし、何より楽しみながら仕事をするということが分かった大事な時間でもあった。

短い時間だったけれど、友達になった大阪の学生たちと別れ、ホテルへ戻るためにバスに乗った。そこでふと気が付くと私とナナミは手を繋いでいて、私たちなりの方法でコミュニケーションをとっていた。大きな言葉の壁などそこには存在しなかった。また、あまり大変な仕事ではなかったけれ

ど、夏祭りの会場でペアになって現場体験をしながら、まちおこしや地域復興のために微力ながらも一緒に何かをやり遂げたという充実感を分かち合える仲になっていた。

その夜、ホテルで花火大会を観賞してからゴールデンベルに参加した。他のチームの日本学生とペアを組んで挑むクイズ大会なんだと聞いたけれど、私は他のチームではなく、同じチームのヒロとペアになった。ヒロと私は一緒に楽しみながらクイズに答えていったが、最後まで残ることは出来なかった。それでも、写真で思い出を残したり、一緒に協力して答えを考えたりすることで、ヒロと仲良くなることができた。

素敵な思い出をたくさん作れたあの日の夜は、チームメンバーで一つの部屋に集まり、明け方まで事業アイテムについて、本当の意味での協力をしながら真面目で有意義な意見交換を行った。日本の友達は、他人と接する時には、常に相手の立場を尊重するし、優しさと情熱に溢れている人たちだなと感じた。

朝日が昇り、私たちは早い時間にみんなで集まり、ホテルの朝食を食べた。まだ3日しか経っていないのに、チームの11人とは、まるで家族のようになっていて、安心して和気藹々と楽しく話をすることができた。朝食の後、ホテルを離れて、別の会場でこのキャンプの一番大きなイベント、事業発表会の準備に取り組んだ。そこでは、ラウンドテーブルを囲んで、前日の話し合いの続きをしながら、事業アイテム企画に取り組んだ。紆余曲折の末、まちおこしと

観光振興のために南三陸の夏祭りをそのまま東京で開催するというアイデアが最終的に事業アイテムとして選ばれた。作業は順調に進んだ。大まかな事業概要を決めた後、繊細で細かな日本のメンバーはパンフレットの制作を、企画能力に富んだ韓国のメンバーは発表 PPT 制作をすることにした。夜 8 時過ぎまで休む間もなく話し合いと制作作業を続けていて私たちは、途中、私たちの事業アイテム自体に弱点が多すぎるという評価を受けた。新しい事業アイテムで事業を企画していく時間がなかったわけではなかったけれど、日本のメンバーが一生懸命作ってくれたパンフレットを無駄にしたいくないという思いで、その評価の内容を日本のメンバーたちに正直に伝えることができなかった。しかし、翌日には、発表のクオリティを上げるためにも、評価の内容を正直に伝えなければならないと思い直し、メンター先生の通訳を通して日本のメンバーたちに話を伝えた。突然の話に日本のメンバーたちは戸惑っていた。それから事業アイテムの変更や改善のために話し合いを続けていたが、その過程で意見のぶつかり合いが増えてきた。時間もなくなってきた。私は、少しずついらいらしてきて、頭の中もぐちゃぐちゃになってきた。同時に、日本のメンバーたちとの間に葛藤が生まれてきているのを感じた。私は、チームメンバーたちの間にできてしまった感情の溝を埋めるために、またできるだけ早く作業を再開するために、事業アイテムを完全に変えてしまうよりは、より具体的で、より現実的なものにできるアイデアをいくつか提

案した。すると、ようやく韓国のメンバーも日本のメンバーも少しずつ心を開き始め、改善した事業アイテムを基に、再び力を合わせて全力で発表準備に取り掛かった。再開が遅くなった分、私たちはホテルに戻ってからも明け方までポスターを作ったり PPT を作ったりと続けて作業に没頭した。

いよいよ事業発表会の当日、ほとんど寝ていない私たちは疲れた顔で、心配を胸に発表会場へ向かった。韓国側の発表者の私とウンジは、移動するバスの中で繰り返し練習を続け、発表会場に着いてからは日本側の発表者たちとも協力して 10 分という発表時間に発表内容を合わせる事ができた。少しずつ私たちの発表内容が形になってきたなと思った頃、発表会が始まった。まもなく私たち発表者 4 人は、緊張と期待を胸に舞台上がった。準備してきた以上に成功裏に発表を終えた私たちは、それから他のチームの発表に耳を傾け、積極的に質問をするなど、精一杯発表会に参加した。

長くて短かった発表会が終わり、私たちはまた事業発表会準備という大切な思い出を残しつつ、あまり期待はしないで表彰式を迎えた。ところが、私たちチーム 1 は、なんと優秀賞に選ばれ、前日までの苦しみや辛さが、いっきに達成感と充実感に変わり、幸せな気持ちに包まれていた。

その日の夜は、優秀賞という名誉を胸に、キャンプファイヤーを楽しみながら、幸せな気持ちのまま一日を締めくくることができた。

ふと気が付くと、日本で活動できる最後の日になっていた。家族よりも親しくなっていた友達と別れると思うと悲しくて仕方なかったけれど、悲しみよりずっと楽しい思い出をたくさん作ろうと心に決めた。私たちは仙台市内へ移動し、一緒に観光とお買い物を楽しんだ後、みんなでプリクラを撮ってからホテルに戻った。ホテルで夕食を食べて、特技披露の時間には、チームの女子5人で明け方まで練習したダンスを披露した。それから、お別れが近付いてきていることを知らせてくれるかのように、ローリングペーパーを書く時間が待っていた。チームメンバー10人一人一人へ、長い手紙を書きたいと思っている自分の心に気づき、この5泊6日という短くて長い時間がどれだけ私に大きな影響を与えたのかを実感した。

本当の最後日がやってきた。韓国にいる両親と友達に会いたいという気持ちもあったけれど、いまはキャンプの友達と別れなければならないという現実が受け止められず、韓国へ帰りたくないという気持ちの方がずっと大きくなっていった。できるだけ悲しみを抑えるために楽しい話をしたり、きれいな写真を撮ったりしてみたけれど、ローリングペーパーを手に、バスに乗り込む

時には、既に涙が零れ落ちていた。

日本に一度も来たことのなかった私にとって、5泊6日は、とてつもなく長い期間に思われた。初めて会う人たちと6日間を一緒に過ごすだなんて、さらに事業発表会と一緒に準備するだなんて、漠然としたことだらけで不安だったけれど、実際ここに来て、素敵なお人たちと素晴らしい思い出をたくさん作ることができたし、一生忘れられない経験もたくさんすることができた。

良く心が通じ合っていて頼りにしていたコンヨンさんとウンジ、私の永遠のパートナー、ナナミ、可愛い韓国の男子たち、情熱的で親切なハヤトとマサキ、いつも明るい笑顔のナナカ、私たちチーム1は、第23回日韓高校生交流キャンプの最高のチームだったと自信を持って言える。また、友達のように優しく接して下さったり、キャンプのために尽力を尽して下さったスタッフのみなさん、絶対に忘れません。大阪ではナナカ、東京ではヒロが私のことを待っていてくれるから、日本語を猛勉強してまた日本に行くチャンスを作ろう。私の夏休みをととても幸せなものにしてくれた日韓高校生交流キャンプ、また日本の友達みんな、ありがとうございました！

## 「景色」



木村 美佑

高崎経済大学附属高等学校 1年

私は以前から韓国のことが好きだった。しかし、どういう国かということは詳しく知らなかった。私は、韓国の学生たちがどのような考えを持っているかに興味を持ち、このプログラムに参加した。

一日目、高鳴る鼓動を抑えながら仙台へ向かう新幹線に乗り込んだ。これからどんな楽しいことが始まるのかと思うと期待感で一睡も出来なかった。仙台駅についたことを知らせる放送を聞き、人生初の東北に足をおろした。バスでホテルに向かい韓国学生の到着を待つ間、なんとか心を落ち着かせようと韓国語勉強の本を何回も読み返した。廊下から賑やかな声が聞こえ、韓国学生が来たことに気付いた。英語で軽く自己紹介をすませ、部屋の5人で写真を撮ったりしたもの気まずい空気は流れていた。最終日までに仲良くなれるかな、と少し不安な気持ちになった。

二日目、養殖漁業体験や介護施設訪問、花火大会や事業案の決定、ゴールデンベルがあった。漁業体験では、船上でとれたてのホタテを初めて食べた。韓国学生の中にも生の貝を食べるのが初めてだという人が

いて、美味しいと言ってくれるのが自分のことのように嬉しかった。

三日目、この日は一日中事業発表準備だった。私達の班は、老人ホームにお住まいのご老人の、外出したいという願いを叶えるための「Kind Go」という事業を行うことになった。議論が熱を帯びるにつれ、意見のぶつかり合いも増えていった。私は普段こんなにも真剣に自分の考えをぶつけ、挑戦することがないので新しい世界に胸が高揚した。また、周りの仲間達の考えに圧倒されることもあり、焦りも感じていた。この日はまだ仕事が残っていたのでみんなで集まって夜中の三時まで案を練り、練習を重ねた。この日、本気でぶつかり合えたことで班の仲間の絆が本当に深まったように感じた。

四日目、事業発表を行った。自分たちで考えた事業の良さを最大限伝える為、全力でプレゼンをした。ついに結果発表、私の所属するチームは最優秀賞を獲得することが出来た。この瞬間の為にみんなと協力してきた時間は長いようでとても短い時間だったように感じた。

五日目、松島に行った。食事処でソフトクリームを皆で食べた。韓国語で書かれているメニューが変だったらしく、韓国の友達が見て笑っていた。本当に楽しい時間を過ごしていたが、明日別れなければならないという思いが心にひっかかり、あまり落ち着いていられなかった。

仙台観光をした時にはみんなでドンキに行った。ほとんど全員が蒟蒻ゼリーを買っていて驚いた。私は今まで韓国で何が流行っているかなどネットでよく調べたりしていたが、百聞は一見に如かずという言葉のように、本当のことは自分で確かめることが一番大切だと思った。ニュースではよく日韓関係のことで問題になっている。しかし国の名前や歴史が違うだけであって、私たちはいくらでも仲良くなれるということ

を知り、本当に大切なことは何かもう一度考え直すべきだと感じた。

この日は仙台のホテルに泊まった。ずっと一緒にいた仲間達のことを気付けば大好きになっていた。次の日の別れがつらく、ひとつの部屋に集まってずっと話していた。たくさんのお菓子を囲み、恋バナやふざけた話、それぞれの国への印象やこのキャンプでの思い出など、思いついたことは何でも話した。それでも時間が足りなくて、寂しくて、一緒にいたくて、朝が来た時にみんなで泣いてしまった。

六日目、最後の朝食を食べ、遂に韓国学生が出発する時間になった。全員とハグをし、時間が戻れと何度も願っていた。日本学生も仙台駅に向け出発した。六日目に見た仙台駅は、初日に見た仙台駅と全く違うものに見えた。

### 「努力、感謝、笑顔! WE ARE SLEEPIEZ!」

李 海仁 (イ・ヘイン)  
天安清水高等学校 1年



息がつまるほど暑い真夏だったけれど、その日の朝はいつもと違う空気に包まれていた気がする。いよいよ今日から第23回日韓高校生交流キャンプが始まるという期待

があったからかな。あるいは、5泊6日の間家族と離れて過ごさなければならないという心配があったからかもしれない。チョンアンから仁川空港へ向かうバスに乗るや

否や、私を襲ってきた心配と期待が入り交じった複雑な心境は、私が第23回日韓高校生交流キャンプの参加者であることを喚起させてくれた。肌に触れるクーラーの風が、あの日の穏やかで静かだった朝の空気をバスの中まで運んでくれた。

なぜか、全く眠くならなかったので、2時間の間ずっと車窓からの風景を眺めていた。結局、バスに乗ったらすぐ一眠りしようと思っていた私の計画とは裏腹に、起きたまま空が明るくなる過程を眺めながら、仁川空港3階の出国ゲートに辿り着くまで、一睡もできなかった。朝の7時までに仁川空港に到着しなければならなかったけれど、6時40分に着いた私は、遅れなかったことに安堵し、チームメイトたちを待った。全員が集まり、荷物を預けて、飛行機に乗るまでも、私たちはまだよそよそしかった。それが、だれよりも面白くて個性豊かなチームになるなんて、あの時だれが予想できたんだろう。

飛行機に乗って2時間後、仙台空港に着いた。蒸すような暑さは韓国と変わらなかったけれど、気持ち良い日差しが、私を歓迎してくれるようだった。バスに乗って南三陸のホテルへ移動している間、日本は本当に清潔な町だなと思った。5年前、津波の被害が一番ひどかった地域だと聞いていたが、津波の傷跡はおろか、自然災害の痕跡すら全く見えなかった。それほど、元の状態を取り戻すために多大な努力を注いだんだなと思うと同時に、見習うべき点だなと思った。

ホテルに到着し、日本のチームメイトが待っている1503号室のドアを引こうとした瞬間、急に色々な心配が押し寄せてきた。日本語が全くできないため、言葉が通じなくて1週間の間一言もしゃべれなかったらどうしよう、性格の違い、文化の違いのため喧嘩になったらどうしよう、などなど頭の中が心配事でいっぱいになってしまった。しかし、ドアを開けたとたん、あふれんばかりの笑顔で迎えてくれた日本のチームメイトたちのおかげで、そんな心配事など蒸気のように消え去っていった。また、韓国語がとても上手なメンバーがいて、楽しく冗談を言い合ったりした。

夕食の後、みんなで震災学習に参加してから、簡単な自己紹介とこれからチームを象徴するチーム名とスローガンを決める時間を持った。震災学習の時に、女将さんの講義を聞きながら、必死に眠気と戦っていたチームメイトたちの様子から、チーム名を「SLEEPIEZZZ」と決めた。もともとは、SLEEPIESだが、眠っている姿を連想しやすくするため、ローマ字の「Z」を混ぜてユーモラスに表現した。スローガンは、みんなで手を合わせて「努力、感謝、笑顔！ WE ARE ～～SLEEPIEZ!」と叫びながら床に倒れるポーズをとるもので、かなり恥ずかしい感じだったけれど、一番目立つスローガンだった。それから、チームで集まって簡単に事業アイテムについて話し合っ、初日の日程が全て終わった。

二日目からは、本格的な事業アイテム企画のため、もう一つの震災学習に参加して

から、養殖漁業体験と日本経済現場体験を行った。直接船に乗って養殖漁業を体験しながら、その場で水揚げされた海産物を試食する機会もあった。涼しい海風は、暑さでいらいらしていた私の気持ちを一気に落ち着かせてくれた。また、ちょうどこの日が南三陸の夏祭りの日だったので、チームメイトと一緒に会場を歩きまわりながら、あれこれ買い食いを楽しんだ。

私たちのチームのカテゴリーは、「介護・福祉」だったので、実際に日本の養護施設を訪れ、施設を利用されているお年寄りの方々と一緒に折り紙をしながら、施設を利用して不便だと思った点や改善してほしいと思われる点などについて伺った。

集めた情報を基に、チームの事業アイテムを決めた。それから、夏祭りを締めくくると花火大会を楽しんだ後、チームメイトではない日本の参加者とペアを組んで、日韓の文化などについての問題に答えていく、勝ち抜きクイズ大会に参加した。

今振り返ってみると、チームメイトたちと楽しい思い出をたくさん作ったこの日は、キャンプ期間中、一番時間が経つのが早かったように思える。

三日目は、一日中事業発表会の準備で大忙しの日だった。南三陸プラザへ移動し、食事以外の時間はずっと発表会の準備をした。溢れ出るアイデアと独特で新鮮な発想をもっていた私たちのチームは、スムーズに事業発表会の準備を進めていった。チームメイトたちだけではなく、カメラマンさんやスタッフの方々とも自然と仲良くな

り、色々なことについて話し合うようになった。そんなふう楽しく事業発表会の準備をしていると、あっという間に夜の10時が過ぎ、ホテルに戻ってきてからも私たちは明け方の4時まで準備作業を続けた。寝るな！と強要する人など一人もいなかったけれど、最優秀賞をとりたいたいという私たちの情熱は、だれにも負けないものであった。結局、ホテルロビーから見える広大な海に向こうから朝日が昇ってくるのを見届けてから各自の部屋に戻り、2時間程度仮眠をとることができた。

いよいよ待望の事業発表会の日、私たちの事業アイテムは、「SILVER OCEAN」という老人養護福祉専門コンサルティング会社を立ち上げることだった。中でも、野外でリハビリ活動をしたいというお年寄りの方々の望みを叶える「GO! GO! オクトパス号」という、利用されていない鉄路を利用し、観光・養護の機能を持ったゆっくり移動する列車を企画した。オクトパス号の中で医療機器フェアを開催し、企業や個人からファンドのような投資を煽るといった事業計画を発表した。

残念ながら、私たちのチームは最優秀賞ではなく、優秀賞を受賞したが、誰も後悔などしていなかった。みんなが力を合わせて一つの結果を生み出せ、発表会を見てくれた皆さんから拍手をもらえたということ自体が、このキャンプで得た掛け替えのない貴重な経験であるということは言うまでもなくみんなが共感していることだったからだろう。



表彰式が終わり、キャンプ場へ移動し、キャンプファイヤーを楽しんだ。キャンプ場では、チームメイトと一緒に美味しい食べ物を食べたり、日本の伝統遊びや手持ち花火を体験したりと、本当に楽しく有意義な時間を過ごした。

ホテルに戻ってきて、ホッとした気持ちで温泉に入った。目の前に広がる夜の海を堪能しながら入れる露天風呂など、韓国では決して味わえない素晴らしい経験だった。この日見上げた夜空の星は、いつもと何か違って見えたし、明後日はこのキャンプも終わるんだと思うと途轍もなく寂しい気持ちになった。

五日目は、みんなで思いっきり楽しむ一日だった。観光船に乗って日本三景の一つと言われる松島を観光した後、仙台市内へ移動しチーム毎に自由観光を楽しんだ。日本で初めてバスに乗ってみたり、お土産もたくさん買ったりと日本を満喫した。

夜は、夕食を食べながら特技披露や両国伝統衣装ファッションショーなどに参加した。初めて着てみたゆかたは、不思議な感じでとてもかわいかった。その後、チームメイトで一つのテーブルに集まり、ローリングペーパーを書いた。キャンプ期間中にあった楽しかったことや初めて経験したこ

となどについてみんなでわいわいと話し合っていたあの時間がものすごく楽しかった。ただ、これが私たちが一緒に過ごせる最後の夜だということだけが、どうしても寂しくて仕方なかった。

韓国へ帰るキャンプ最終日、朝早く起きて慌ただしく荷物をまとめて空港へ出発する準備をした。仙台空港へ向かうバスに乗った時、日本の友達が泣いているのが見えた。今思い返してみると、うちのチームメイトたちはとても個性豊かだったけれど、いつも笑顔でお互いの意見を尊重し合ったため、喧嘩など一度もしたことがなかった。今でも、キャンプの初日、韓国で買ってきたお土産を渡した時に、屈託のない笑顔で喜んでくれたみんなの顔が忘れられない。私たちが一つになって叫んでいたあのチームスローガンが、みんなのあの笑い声が、誰が何といおうと私にとっては、とても特別なものとして残っている。

いつの間にか仲良くなっていたスタッフの方々、メンター先生たち、本当にお世話になりました。長くて短かった5泊6日の間、忘れられない大切な思い出を作ってくれたチーム3のみんな、本当に楽しかったよ。ありがとう！必ずまた会おうね！

